



WEBにも掲載しています

編集 はなぐるま編集委員会  
〒141-0031 品川区西五反田 3-6-3 TEL:3491-2000  
sakile@city.shinagawa.tokyo.jp FAX:3491-2002  
発行元 大崎第一地域センター

## 品川区

# ゆかりの偉人

【前編】

行元寺(西五反田)の住職で書家としても活動する印南慶俊(号豊道溪俊)さんは、近代書道の礎を築いた書家で僧侶の豊道春海さんの孫です。慶俊さんの父・溪龍さんも書家と僧侶で、三代にわたり作品を揮毫し寺を守っています。春海さんの功績や区内で見られる作品、書道の楽しさや自身のことについて、慶俊さんに話を伺いました。前後編に分けてお届けします。

## 書への想いに 突き動かされて

春海さんは大正時代、東京府美術館(現東京都美術館)で書道の展示会を開きました。それまでは畳敷きの大きな部屋に軸を掛けてみんなで観賞するサロンのような集会所がなく、書は美術界に受け入れられていませんでした。そんな状況の中、春海さんは同館に出資した実業家の佐藤慶太郎さんに直訴し、賛同を得たことで展示会を開催。美術館やギャラリーで書を楽しむ現在の基盤を作り上げました。

第二次世界大戦後の昭和23年には、日本画、洋画、彫刻、工芸美術の四科だった日展に第五科として書を新設し、美術界での価値を押し上げました。春海さんは書への強い想いから、教育の分野でも功績を残しています。戦後、小学校で廃止



中国の奉先殿で大字を揮毫する春海さん(昭和33年)

された毛筆習字を復活させるため、連合国軍最高司令官のマッカーサーに陳情書を提出。「自決の覚悟で文部省(現文部科学省)に通い詰めて主張を通した」と慶俊さんが話す通り、陳情を続けた結果、昭和26年に毛筆習字は復活を果たしました。

昭和33年に国交回復前の中国から正式招待を受けて訪中した春海さんは、書を通じて日中友好の架け橋となっただけでなく、昭和39年に北京、広州、上海で開かれた個展で約33万人を動員。昭和42年には書道界初の文化功労者に選ばれました。

## 孤独な環境が 精神力を育てた

春海さんは6歳の時に母を亡くし、叔父のいる上野の春性院という寺へ引き取られます。その後も勤当と称しているいるな寺へ出されるのですが、行く先には必ず学問僧がいて、さまざま

まな知識や経験を得ることができました。「ある意味で非常に恵まれていますが、子どもの頃から他人の中で暮らした春海は自分独りだと感じていたはずです。一本筋の通った意志の強さや他人を排斥しない態度は、このような環境によって養われたのでは」と慶俊さんは語ります。

## 品川区には 春海さんの 作品が今も残る

品川区周辺では現在も春海さんの作品を見ることが出来ます。まずは目黒不動尊(瀧泉寺)にある「春洞西川先生碑」。同寺入り口に建つ「目黒不動尊瀧泉寺」の石碑は慶俊さんの作品です。春海さんの作品はほかにも、稚子神社の「立石翁碑」、氷川神社の石碑「氷川神社」と社務所の入り口に掛かる「参衆殿」、山手通り沿いに営業部本店がある「城南信用金庫」、安養院の寺号と名号の石碑があります。日光山輪王寺や浅草寺、人形の「久月」、文部省の看板なども手掛けました。慶俊さんの妻の陽子さんは、「石碑を見れば歴史も学べます。ぜひ近づいてみてください」と呼び掛けます。

(編集委員 若松)



慶俊さんの作品

大崎第一地域センターでは、「はなぐるま」のほかにも SNS やサイトで、地域の様々な情報を発信しています。ぜひご覧ください！



Twitter @WWjec5ui2p9LyDC



Instagram @osakidai1



大崎×五反田 Link

地域共創メディア [大崎×五反田 LINK]

